

明治14年政変1881=

鹿児島市樋之口町で、旧薩摩藩藩医橋口兼満の三男に生まれる。本名清。

父は骨董好きで四条派風の絵を描き、二人の兄も絵を嗜むという環境に育ち、

後に妹が生まれる。

帝国憲法發布1889= 8歳：

帝国議會始・1890＝9歳：

地元の狩野派内山一観や四条派の平山東岳に絵を学んで、

日清戦争始・1894=13歳：鹿児島高等中学{造士館}に入学後、

日清戦争終・1895=14歳：早くも、名画の模写綴った「**絵画帖 全**」を制作、

Bushidou・・1899=**18歳**：卒業すると、画家を志して、帝大に通っていた長兄、次兄を頼って、上京。初めは橋本雅邦のもとで日本画を学び、後に白馬会溜池研究所に通って西洋画を学ぶ。

7/国産化・1900=19歳：第8回絵画共進会に橋口五葉の名で日本画3点を出品。画号は、鹿児島の実家にあった地域のランドマークの樹齢300年の五葉松にちなむ。遠縁の黒田清輝の勧めで、東京美術学校西洋画科予備課程甲種に入学、

田中正造直訴1901=20歳：_本科に進み、白馬会第6回展に出品。美術学校の競技図案で合格採用される。

教科書疑獄・1902=21歳：白馬会第7回展に出品。丸善で、ラファエル前派の画集を購入。_草花への愛着と図案への志向が強く、

日比谷公園・1903=22歳：東洋汽船会社が東京美術学校に依頼した懸賞図案に応募，最高位の2等となる。

日露戦争始・1904=23歳：成績優秀で東京美術学校の特待生に。長兄が熊本の第五高等学校で教え子だった関係で夏目漱石と絵葉書を交換するうち、漱石の薦めで雑誌「ホトトギス」に挿絵を発表。「自画像」を納めて、

日露戦争終・1905=24歳：*首席で卒業，研究科に進む。漱石から「吾輩ハ猫デアル」の装幀を依頼され，上編刊行でデビュー。

満鉄発足・・・1906＝25歳：続いて漱石の「漂虚集」「I・AM・A・CAT」「吾輩ハ猫デアル」中編、漱石の作品を次々装幀するうち、

韓国反日暴動1907＝26歳：「鶉籠」「吾輩ハ猫デアル」下編の装幀。{日本装飾美術会}設立に参加。東京勧業博覧会図案部に二枚折衝立「孔雀と印度女」を出品し、2等賞牌。洋画家としては第1回文展に「羽衣」出品して入選するも以後落選続き。

アラギ 創刊・1908=27歳：_アールヌーボー風デザインが評判となり、漱石以外の装幀も手掛けるようになる。

韓国併合・・・1910＝29歳：漱石の薦めで朝日新聞の文芸欄に美術評論「現今の日本画」を発表。「鏡花集」などの装顧を手がける。

大逆事件判決1911＝30歳：*イラストでも活躍し、三越呉服店主催の懸賞広告画の募集に「此美人」を出品し、第1等、懸賞金1000円を獲得して有名になった。{靱山書店}企画の叢書のための装幀は、蝶をモチーフとし、第一冊泉鏡花著「三味線堀」以降、「胡蝶本」と愛称される。泉鏡花著「銀鈴集」は函の装幀としての代表作。

明治天皇没・1912=31歳：日本画革新をめざす若手グループ{无声会}に参加し、第12回展に、紙本著色「黄薔薇」ほか7点を出品。

大正政変・・1913=32歳：(美術新報)の装幀特集に「思い出した事ども」として談話を寄せる。漱石本の装幀は「行人」までつとめ、"胡蝶本"もこの年まで、24もの名作の表紙を飾ったが、生来病弱で、脚気の悪化もあって、以後、閉居がち。

第一次大戦始 1914=33歳：浮世絵の美に惹かれて、渡邊庄三郎に取材した初の論文「広重の版画について」発表、以後、装幀は減少、21ヶ条要求・1915=34歳：浮世絵研究誌（浮世絵）発刊され、第1号から次々論文を寄稿。渡邊庄三郎を版元とする新版画の運動に参加

民主主義・1916=35歳：その勧めで、別府訪問以来頭を離れない「浴場の女」の版下絵を描き、渡邊版画店より木版画「浴場の女」が刊行されるも、当局の摘発を避ける以上に、刷り上げりに満足できず

ロシア革命・1917=36歳：自ら編纂監督説した「浮世風俗やまと錦繪」全十二集刊行，冊子の装頼も手掛けた。私家版制作に入り，本格政党内閣1918=37歳：自ら編纂監督した復刻木版全六十枚の「広重・保永堂板東海道五十三次」刊行。「耶馬溪」に続く，「化粧の女」に結実，肉体表現に新しい感覚をみせ，「手鏡」「手拭いを持つ女」「かがみの前」と続く。

ベルギー条約・1919=38歳：自ら編纂監督した復刻木版全四十八枚による「歌麿筆浮世繪」を刊行。

大暴落・・・1920=39歳：〔浮世絵〕終刊まで寄稿を続けた。*なかでも、「髪梳ける女」は、新ロマン派の傾向と写実的な影を持つ傑作で、同年、独立して、一連の大判美人画、風景画を制作し始め、のちに奇跡の年とまで言われるが、

原敬首相暗殺1921=40歳：_10数点の作品を残したのみで、中耳炎から脳膜炎を併発し、急逝した。
主版のみ完成していた木版「温泉宿」は、のちに、五葉の甥橋口康雄が多色刷りを加えて版画化。